

鎖国時代、唯一の日本人町であつた「倭館」の記録。政治・経済・文化をめぐる日本と朝鮮の交流の実態を微細に探ることのできるきわめて特異な史料。唯一国立国会図書館のみに現存する史料を初めてマイクロ化。

対馬宗家文書

● 第Ⅳ期 ●

監修 田代和生

慶應義塾大学教授

倭館館守日記・裁判記録

16ミリポシティブロール

全120リール

＋別冊3

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBOU



監修のことば

慶應義塾大学教授

田代 和生

対馬藩宗家の文書は、内容が国際色に富み、かつその量が総点数、十数万点といわれるほど膨大なことで知られている。とくに宗家の行っていた朝鮮国との外交や貿易が、対馬を「鎖国」時代にあっても東アジア国際社会に開かれた窓口のひとつにした。

ところが藩政時代が終わると、これらの特徴が裏目に出た。たとえば戦前は、日本の朝鮮半島における植民地政策のもと、六万点以上の宗家文書が朝鮮総督府によって買い上げられ、海外に流出してしまった。また国内に残る宗家文書も、一所でまとめて保管することができず、最近判明した分を加えると、東京だけで五カ所、対馬を合わせると合計六カ所に分割される原因になった。もともと宗家文書は、対馬藩庁・朝鮮釜山の倭館・江戸の対馬藩邸でつけられ、伝えられてきたものである。記録類は長い年月とともに互いに入出入りを繰り返して、他所の写しや控などが作成され、別所に移されたものも多い。このため、宗家文書のいずれもが相互に関連したものであることはいうまでもない。

貴重な宗家文書の存在は、日本のみならず、海外にも知られるようになった。とくに最近、韓国の歴史学者が宗家文書に注目し、日本の古文書にとり組んでおられる。そうした方々のためにも、いつかこれらの文書が整理され、ひとところで見られるようになって欲しい。それが、この研究にたずさわってきた者が一様に抱く、積年の「夢」であった。

この入手困難な一級史料を、手もとにおいて縦横に活用できるよう、このほど東京に保管されている宗家文書から、順次マイクロフィルム化という形で刊行に踏み切ることになった。それも、慶應義塾図書館本は通信使記録、国立国会図書館本は倭館記録、東京大学史料編纂所本は江戸藩邸記録と、それぞれの保管所の核となる記録を選び、さらに欠本となっている部分については、韓国国史編纂委員会や東京国立博物館などの協力を得て補充をはかるなど、できるだけ完全なシリーズ本の復元をめざしている。

宗家文書は、アジアの隣国と最も友好な時代を築いたかつての日本の姿を、あますことなく語ってくれる。それは単なる歴史の一事象ではなく、これから二十一世紀の国際社会を生きるわれわれにとって、学ばべき現代的課題でもある。できるだけ広く、内外の多くの人々がこの文書に接することができるよう、いまここにマイクロフィルム版『対馬宗家文書』を世に送り出す次第である。

待望の史料群を手許に

東京大学名誉教授

田中 健夫

対馬藩宗家の史料は、江戸時代の大名家の史料のなかできわめて多彩で豊富な内容をもっており、しかもよく整備されている。とくに対馬藩が朝鮮との交流に独占的にたずさわってきた関係から、その膨大な史料群は日朝関係を解明するためには不可欠のものとして注目されてきた。ただ宗家史料は、明治以後さまざまな経緯を経て分散し、現在は韓国国史編纂委員会・対馬歴史民俗資料館・東京大学史料編纂所・国立国会図書館・慶應義塾大学等に所蔵され、少数の研究者以外には十分に利用研究されることがなかった。今回、多年日朝関係史を専攻してきた慶應義塾大学の田代和生教授が監修して、これらに東京国立博物館所蔵の史料等に加え、テーマごとにマイクロフィルムに収録するという。これからは、韓国にゆかねば調査できなかったような、閲覧に不便だった貴重な史料を、手許において見ることができるようになる。積年の渴望をいやす壮挙であり、福音である。日韓両国の研究者による縦横の活用とその研究成果を期待したい。

推薦辞

元大韓民国国史編纂委員長・ソウル大学校名誉教授 李 一元淳

近世日韓関係史において、対馬はユニークな歴史的役割を占めていました。そのために、対馬藩の記録である宗家文書は日韓交流史研究の基本史料として学問的に注目されてきました。ところが、現在、宗家記録は対馬藩の本舞台である対馬と江戸藩邸があった東京のいくつかの古文書関係機関とともに、我が韓国の歴史史料機関である国史編纂委員会等、日韓両国のいくつかの機関に分散秘蔵されているので、研究者の利用が至難で何らかの方法で研究の便がはかられる様熱望されてきました。

此度「ゆまに書房」が以上諸機関に秘蔵されている「宗家記録と日韓交渉史料」を総合し、マイクロ・フィルムでその全体を一つにまとめ刊行されるとの企画は、日韓交渉史研究者にとって一大朗報と云えましょう。この史料が公刊される事によって日韓交流史研究が促進される事を信じ、又、新しき時代の日韓関係創造に寄与し得る学問の糧になると思料し、同社の勇断に敬意を表しながら敢えて推薦する次第であります。

現代的意義を評価

元韓国駐在日大使

須之部量三

もう随分以前のことになるが、曾って、ソウル特別市に隣接する果川市所在の韓国国史編纂委員会を訪ねたことがある。その時のわれわれ一行の中に田代和生先生がおられ、同委員会に所蔵されている対馬文書の現物を手にして、その史料としての意義をうかがうことが出来た。恒らく、その頃から既に、田代先生は日本内外に分散した宗家記録をマイクロフィルム化する構想を持っておられたのであろう。その後の、日韓文化交流に関する国際会議の際にも、田代先生はその種の発言をしておられた。

昨今、日本と韓国との間の歴史認識についての議論が高まっている。大いに歓迎すべきことであるが、歴史研究を進めるためには、何よりも、日韓双方における貴重な一次資料が広く利用し易くなることが肝要である。

今回のゆまに書房の企画の持つ現代的意義を評価して、これを江湖に推奨するものである。

閲覧困難な近世日朝交流の第一級史料

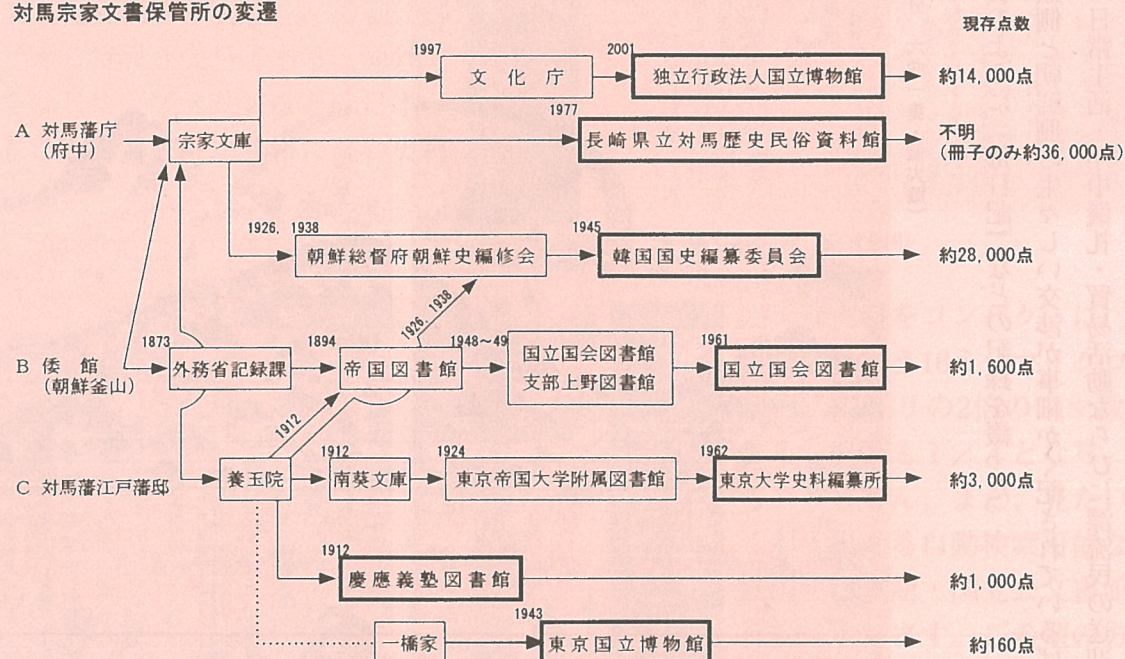
対馬宗家文書の由来と 保管所の変遷



対馬藩宗家に伝わる古記録・古文書の類は、江戸時代の諸大名のなかでも、質・量ともに特筆すべきものがある。いわゆる「鎖国」といわれる時代、日本は朝鮮国と対等な外交関係を樹立していた。徳川幕府は、この対朝鮮関係にかかわる煩雑な実務を対馬藩に一任しており、このため「宗家文書」は、当時としては珍しい国際色豊かな内容となった。しかも国際関係というのは、口約束だけではなく、文字にして記録にとどめておく必要がある。対馬藩では、実務をおこなった釜山の倭館において、記録の作成と保管を義務づけていた。かくして総点数、数十万といわれる膨大な記録類が誕生したのである。「宗家文書」は、おもに1対馬藩庁、2倭館、3江戸藩邸、の三カ所で保管がなされていた。もとより、対馬藩という一つの藩政機構に属したものであるから、その内容は対朝鮮関係にかかわるものだけでなく、領内治政あるいは幕府や諸大名との関係記録も多く含まれている。長い間に記録類は互いに入出入りを繰り返して、また他所で記録・保存されていたものの写しや控の類が作成され、別所に置かれるようになったものも多い。やがて近代にいたり、左の図のような経路をへて、現在は七つの機関に保管されている。

田代和生「宗家記録と朝鮮通信使展」(朝日新聞社刊) 所収

対馬宗家文書保管所の変遷



※2004年6月現在。製作：田代和生

● 倭館とは

創設時は、朝鮮王朝が日本人使節接待のために設けた客館であったが、しだいに、応接所や使者の泊まる宿泊所、滞在中に行われる貿易所などの複数の建物が置かれた日本人の居留地域を指すようになった。海外渡航が厳しく禁止されていた江戸時代において、倭館は日本人が国外に居留していた唯一の地である。

延宝六（一六七八）年、釜山の豆毛浦^{トモボ}から草梁^{チョリョン}へ移された倭館は、約一〇万坪の敷地を持ち、長崎唐人屋敷の一〇倍、出島の二五倍にも相当する広大なものであった。

倭館には、倭館を統括する館守、外交交渉官の裁判^{さいはん}、貿易監督官である代官のほか、僧侶や通詞、検査役の横目などの役人が常駐し、それらの役人の屋敷や貿易会所の開市大庁^{かいしだいちやう}、寺・浜番所、豆腐屋・畳屋・酒屋等の商店が点在していた。館外には外交使節を応接する宴大庁や朝鮮側訳官の官舎である誠信堂、外交儀礼施設の草梁客舎など朝鮮側の建物もあった。

倭館の住人は、すべて対馬藩から派遣された男性ばかりで、常時四〇〇〜五〇〇人ほどの在留者がいた。

● 『倭館館守日記』と『裁判記録』

対馬藩は、草梁倭館移転後の一七世紀後半以降、倭館における朝鮮との交流から、記録の充実と保管を意図的に進めた。外交使節は倭館で公文書^{しきけい}（書契）を取り交わし、所定の儀式をこなさなければならない。その格により、贈答品の包装から饗応の内容まで違っている。ほんの些細な手違いが両国の友好をそこない、外交の破綻を生む。煩瑣な外交は中世以来の故実や先例に基づく。そのためにも記録は必要であった。日朝外交をかかえる対馬藩の情報ノートが必要だったのである。

このため、倭館を統括する館守をはじめ、外交交渉官の裁判、貿易監督官である代官、公文書の起草などを担当する僧侶、検査役の横目までおもだった倭

特色と 内容見本

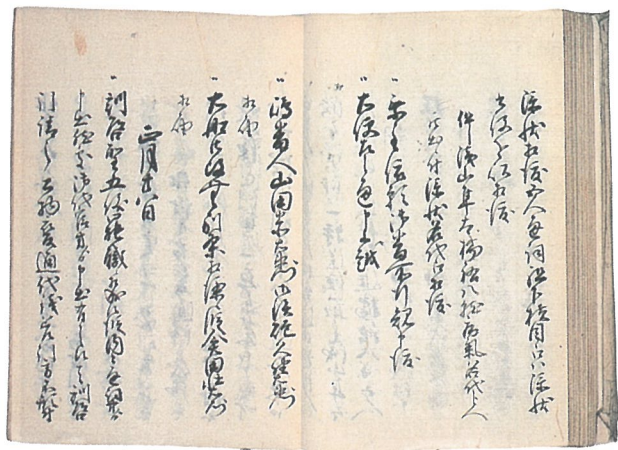
※掲載史料は全て『宗家記録と朝鮮通信使展』（1992年・朝日新聞社刊）より転載。
原本は国立国会図書館所蔵。

明治政府が接收した、日朝関係の実態はいかなるものであったのか。「倭館記録」は、江戸前期から明治初年にかけて連続して書きつがれた在外史料である。そこに近代日朝外交史を探るための貴重な前史が秘められている。

近代日朝外交史 必須の前史

● 「倭館記録」の変遷

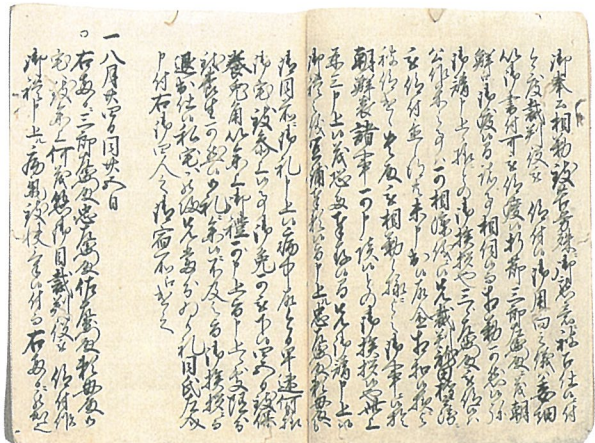
明治維新後、政府はすばやく日朝外交を宗家から外務省に移し、早々と倭館の接收を行った。同時に多数の記録類も外務省記録課の管轄下に入った。当時、朝鮮外交のたよるべきものは、旧幕時代の古文書であった。しかし、急速に進展する近代外交の動きは、もはや文書の必要性をなくし、それらは歴史資料として、国立国会図書館の前身である帝国図書館へ移管された。今回刊行する『倭館館守日記』（表紙は『館守日記』または『毎日記』）、『裁判記録』がこれであり、この「倭館記録」全体の四分の三以上を占める。



▲『館守日記』（天保年間）

江戸時代の「鎖国」体制のなか、倭館は日本人が国外に居留した唯一の地であった。「倭館記録」は、日朝外交交渉史や通商貿易史のみならず、異国に在留した日本人の衣食住と性をめぐる生活諸相や、犯罪と紛争ならびに文化交流等の実態を、微細に探ることができる特異な史料である。海外では、韓国をはじめ、アメリカなどの日本・朝鮮研究者たちの関心度が非常に高い史料である。

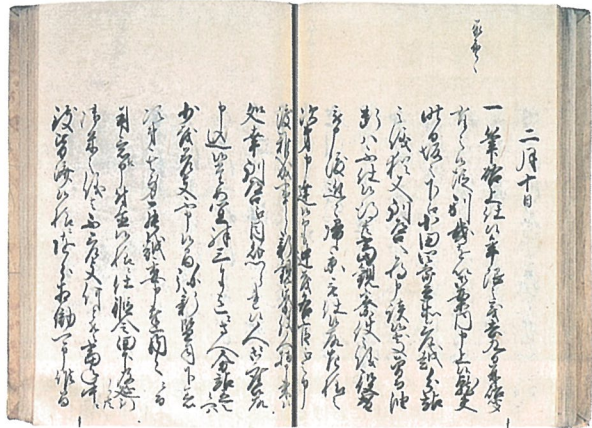
異文化交流史の 第一級史料



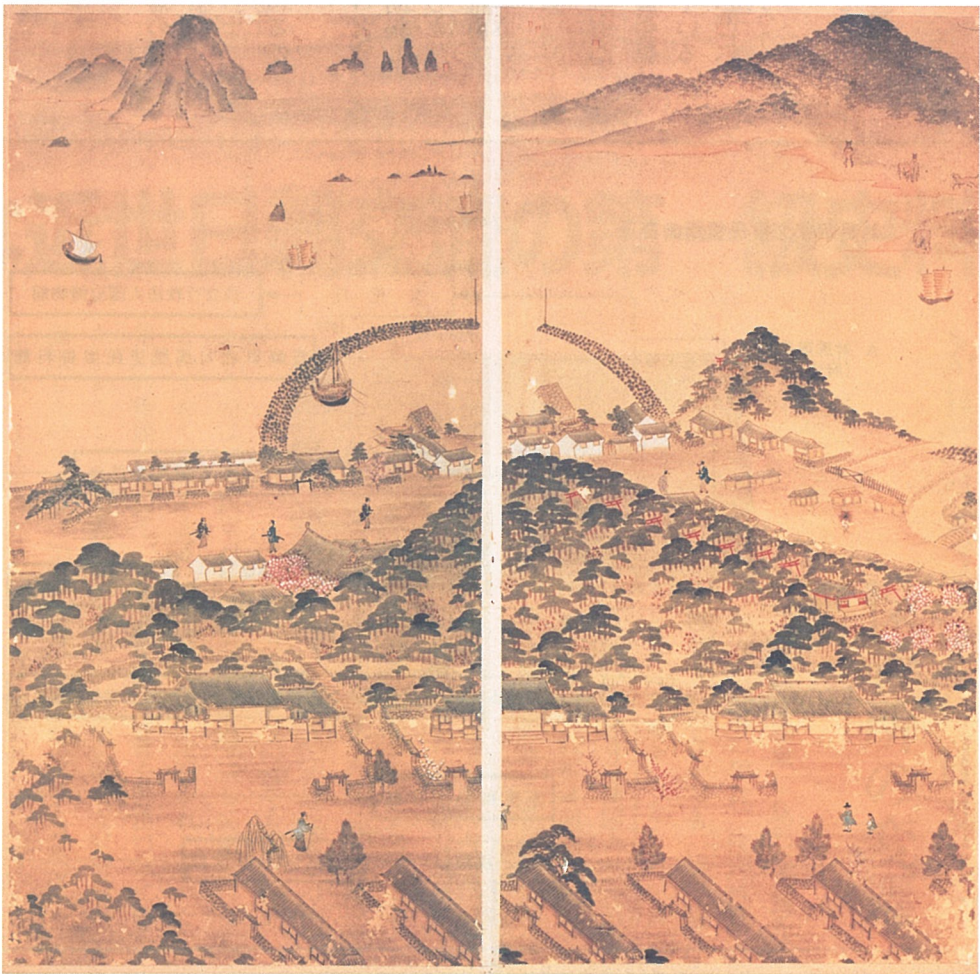
▲『裁判記録』（宝永年間）

膨大な史料を コンパクトに収録

膨大な史料をコンパクトに、かつ廉価に提供できるよう16ミリマイクロフィルムにて刊行。35ミリの2倍のコマ数が収録できるため、容積も1／4となり、収納スペースもとりません。また、見たい史料をすばやく引き出せる自動検索可能なカセット（国立国会図書館・国立公文書館等採用）への転換も承ります。ご希望の方は、ご注文の際お申し付け下さい。（詳細につきましては、弊社営業部までお気軽にお問い合わせ下さい。）



▲『裁判記録』（享保年間）



●草梁倭館図屏風（部分、六曲一隻・個人蔵）

館の職員は、連日のように『毎日記』などの記録を綴った。

そこには、倭館側と朝鮮側の生々しい交渉が事細かく記されているばかりではなく、在留者の日常生活・年中儀礼・貿易活動ならびに漂流民の送迎や密貿易などの犯罪行為まで、多彩な生活相が生き生きと描かれている。異国の地における日本人像を知るうえでも、これ以上良質な記録はない。

外交史料・貿易史料のみならず、異文化交流史の第一級史料といわれるゆえんがここにある。

対馬宗家文書 第Ⅲ期

倭館館守日記・裁判記録

リール
配分一覧

Vol. 1 ～Vol.40
＝第 1 回配本全40リール

Vol.41～Vol.80
＝第 2 回配本全40リール

Vol.81～Vol.120
＝第 3 回配本全40リール

倭館館守日記 ※現在ある記録をすべて時系列で並び直した。

年 代	館 守	冊 数	リール番号
貞享期	吉田作右衛門	1	1
	深見弾右衛門	5	1
元禄期	嶋雄八左衛門	4	1・2
	仁位助之進	4	2
	幾度六右衛門	7	2
	内野権兵衛	8	2・3
	唐坊新五郎	8	3・4
	寺田市郎兵衛	9	4・5
	嶋雄八左衛門	8	5・6
	小川又三郎	2	6
宝永期	俵五郎左衛門	4	6・7
	樋口久米右衛門	6	7・8
	平田所左衛門	3	8
	樋口内記	2	8・9
正徳期	吉川六郎左衛門	6	9・10
	吉田兵左衛門	10	10・11
享保期	井田四兵衛	7	11・12
	浅井与左衛門	13	12～14
	樋口弥五左衛門	6	14・15
	仁位孫右衛門	5	15・16
	平田所左衛門	8	16・17
	吉川内蔵允	8	17・18
	平田内膳	7	18
	杉村帯刀	15	19・20
	幾度六右衛門	12	20～22
	松尾奎	10	22
	嶋雄八左衛門	11	23・24
元文期	平田直右衛門	12	24・25
	俵主膳	11	25・26
寛保期	浅井与左衛門	9	26・27
	内野市郎左衛門	5	28
	平田所左衛門	8	28・29
延享期	幾度治左衛門	10	29・30
	内野権兵衛	13	30・31

年 代	館 守	冊 数	リール番号
寛延期	多田平左衛門	9	31・32
	樋口勘吾	15	32～34
宝暦期	吉田七左衛門	10	34・35
	杉村帯刀	1	35
	多田主計	11	35～37
	平田所左衛門	11	37・38
	平田内膳	6	38・39
	戸田重左衛門	11	39・40
明和期	杉村弁之進	14	41・42
	小河右近右衛門	11	42
	田嶋左近右衛門	9	43
	岩崎喜左衛門	13	43・44
安永期	杉村弁之進	12	45・46
	原宅右衛門	9	46・47
	戸田頼母	15	47・48
天明期	幾度主膳	16	48～50
	島雄太膳	14	50・51
	吉田彦右衛門	6	51
	戸田頼母	15	52・53
寛政期	多田左膳	8	53
	小川縫殿介	10	54
	戸田頼母	12	55・56
	樋口左近	2	56
	戸田頼母	23	56～58
	大浦兵左衛門	18	59・60
文化期	番盛之介	9	60・61
	鈴木一之進	13	61・62
	田中所左衛門	14	62・63
	小河三四郎	10	64
	小野十郎兵衛	7	65
	平田帯刀	15	65・66
文政期	幾度八郎左衛門	9	67
	原大作	10	68
	小川外記	9	69
	三浦大蔵	2	70
	小川外記	3	70
	三浦内蔵允	10	70・71
	仁位久兵衛	6	71・72
	仁位孫一郎	15	72・73
天保期	樋口亘理	10	74
	吉川右近	16	75・76
	古川采女	27	76～80
弘化期	樋口弾正	13	81・82
嘉永・ 安政期	吉田大蔵（外守）	14	82～84
	俵郡左衛門	35	84～89

年 代	館 守	冊 数	リール番号
幕末・ 明治初期	吉川内記	4	89・90
	番縫殿介	5	91・92
	原宅右衛門	4	92・93
	番縫殿介	9	94～96

裁判記録・訳官記録

年 代	裁 判	冊 数	リール番号
貞享期	—	—	—
元禄期	—	—	—
宝永期	佐治宇右衛門	12	97・98
	原五助		
	龍田権兵衛		
	加納幸之助		
天明期	嶋雄八左衛門	12	97・98
	幾度主膳		
	島雄太膳		
	吉田彦右衛門		
正徳期	寺田市郎兵衛	7	98・99
	樋口久米右衛門		
	幾度六右衛門		
	雨森東五郎		
享保期	龍六郎右衛門	40	99～103
	樋口孫左衛門		
	吉川六郎左衛門		
	三浦酒之允		
	鈴木政右衛門		
	松尾奎		
元文期	幾度六右衛門	14	103・104
	雨森東五郎		
	吉川六郎左衛門		
	浅井与左衛門		
	内野一郎左衛門		
	原熊之允		
延享期	幾度又右衛門	15	104～106
	樋口五左衛門		
	平田直右衛門		
寛延期	鈴木市之進	9	105・106
	小野六郎右衛門		
	島雄八左衛門		
宝暦期	幾度治左衛門	34	106～108
	吉川兵部左衛門		
	多田主計		
	内野佐左衛門		
	幾度九左衛門		
	松浦讃治		
	幾度九左衛門		
	吉村橘左衛門		
	樋口左衛門		
	平田所左衛門		

年 代	裁 判	冊 数	リール番号
明和期	吉村橘左衛門	17	109・110
	中庭作左衛門		
	嶋雄只右衛門		
	三浦源之進		
	朝岡一学		
	岩崎喜左衛門		
	内野紘		
安永期	戸田三左衛門	6	110
	樋口与左衛門		
天明期	小田郡右衛門	17	111・112
	内山叶		
	渡辺六之進		
寛政期	平田又左衛門	10	112・113
	幾度主膳		
	河内徳左衛門		
文化期	黒木勝見	12	114・115
	古川又三郎		
	幾度主膳		
	河内徳左衛門		
文政期	多田源右衛門	11	115～117
	俵五郎左衛門		
	津留又蔵		
	内山郷左衛門		
	樋口孫左衛門		
	有田謙		
天保・ 弘化期	小野十郎兵衛	16	117・118
	島雄権右衛門		
	樋口太郎兵衛		
	杉村司		
	幾度哲輔		
嘉永期	幾度哲輔	4	119
	樋口監物		
	田嶋造酒允		
	難波早衛		
幕末・ 明治初期	吉川左衛門	14	119・120
	幾度治左衛門		
	内野権兵衛		
	多田佐一郎		
	渡辺小右衛門		

【注】①館守は就任年代を、裁判は着館年代を取った。②名前の表記については、長正統「日鮮関係における記録の時代」（『東洋学報』第50巻・第4号に所収）によった。③元号の切れ目は実際に即した。

対馬宗家文書 ●第Ⅲ期●

倭館館守日記・裁判記録

監修：田代和生 慶應義塾大学教授

全120リール（16ミリポジティブロール）＋別冊 3

■揃予価5,906,250円（本体5,625,000円） ISBN4-8433-1247-9 C3821

第1回配本

巻数 全40リール＋別冊上 2004年12月刊行予定
収録 【国立国会図書館所蔵】館守日記（貞享～宝暦）
揃予価 1,968,750円（本体1,875,000円・分売不可） ISBN4-8433-1248-7

第2回配本

巻数 全40リール＋別冊中 2005年11月刊行予定
収録 【国立国会図書館所蔵】館守日記（明和～天保）
揃予価 1,968,750円（本体1,875,000円・分売不可） ISBN4-8433-1249-5

第3回配本

巻数 全40リール＋別冊下 2006年11月刊行予定
収録 【国立国会図書館所蔵】館守日記（弘化～幕末・明治初）
裁判記録（宝永～幕末・明治初）
揃予価 1,968,750円（本体1,875,000円・分売不可） ISBN4-8433-1250-9

対馬宗家文書

〔第Ⅰ期〕朝鮮通信使記録 好評発売中

- 巻数：16ミリポジティブロール137リール
- 原本所蔵機関：慶應義塾図書館ほか
- 揃予価6,230,700円（本体5,934,000円）

〔第Ⅱ期〕江戸藩邸毎日記 好評発売中

- 巻数：16ミリポジティブロール96リール
- 原本所蔵機関：東京大学史料編纂所
- 揃予価4,725,000円（本体4,500,000円）

特にお薦めしたい方

日本史、社会経済史、朝鮮史、日朝関係史、東アジア史、外交史、比較文化史、情報史、交通史、政治史、法制史および思想・文学・美術・音楽・食文化など各種の文化史、などの研究者・研究機関。図書館。政府関係団体。

ゆまに書房

〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL 03 (5296) 0491
FAX 03 (5296) 0493
<http://www.yumani.co.jp>

●総発売元

株式会社 紀伊國屋書店

営業総本部